

看護職者の関係維持スキルと個人の内的属性との関係

林稚佳子¹⁾、横田恵子²⁾、高間静子²⁾

1) 国立療養所富山病院附属看護学校

2) 富山医科薬科大学医学部看護学科

要 旨

看護職者の人間関係能力のうちの他者との関係維持スキルと、個人の内的属性であるコンピテンス、自己概念、セルフモニタリング、自己効力感、自己受容、自己意識等との関係を調べた。調査対象は、3つの総合病院に就労する看護師410名とした。関係維持スキルの測定には、和田のソーシャルスキル尺度を、コンピテンスの測定には青年のコンピテンス評価尺度を、自己概念の測定にはSelf-Esteem尺度を、セルフモニタリングの測定にはセルフモニタリング尺度を、自己効力感の測定には一般性セルフエフィカシー尺度を、自己受容の測定には自己受容測定尺度を、自己意識の測定には自己意識尺度を使用した。その結果、看護職者の関係維持スキルと「コンピテンス」「自己意識」「セルフモニタリング」との間に有意な相関があった。また、関係維持スキルに最も影響していたのは「コンピテンス」であり、続いて「自己意識」「セルフモニタリング」等が影響していた。

キーワード

関係維持スキル、コンピテンス、セルフモニタリング、自己意識、自己効力感

序

看護は患者と看護職者の人間関係を基盤に行われるものであり、看護職者が提供する看護ケアの有効性には、人間関係の信頼性の形成が大きく影響する。看護職者には、専門的な知識・技術とともに対人関係能力が求められる。稲田は、看護者の各層（作業層、監督層等）に必要な技能を指摘しているが、すべての看護職者に共通して重要な能力として、よい人間関係を築くための「対人技能」を挙げており¹⁾、対人技能は、患者と看護者との信頼関係を築き、効率的な看護ケアにつながるものと考えている。

人間関係では、他者と調和的な関係を保つことを重要視する。ところが、人間には、他者との関係を容易に開始し長く持続できる人と、うまく人

間関係を開始できず、また、開始できても維持できず悩む人をよく見かけ、人間関係には個人差があり、個人の内的特性が大きく影響することが推察できる。よい人間関係を形成していくための要因として、従来から思いやりややさしさ、共感性などの研究が行われている²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。千葉・相川等は、患者と看護職者の関係に社会的スキルを適用し、社会的スキルの個人差を測定する尺度を作成している⁷⁾。しかし、社会的スキルと看護職者の内的属性との関連についての研究は見当たらない。本研究では、患者と看護職者の関係を社会的スキルの観点から捉え、対人関係における個人差に注目し、看護職者個人の内的属性がどのように社会的スキルに影響を与えるかを検討した。

看護学生は、青年期における自我同一性の確立という人間性の発達途上にあり、同時に専門家と

してのパーソナリティの形成が社会的な課題として求められている。患者との信頼関係を築き、看護職者が提供する看護ケアを有効なものにするには、看護基礎教育の場で、社会的スキルの発達を促す教育を体系的に実施していくことが必要である。本研究は、看護職者の内的属性と社会的スキルとの関連性をあきらかにし、社会的スキルの発達を促す教育を検討するうえでの基礎資料とすることを目的とした。

和田(1991)によると、社会的スキルは、対人関係における関係開始、関係維持、自己主張の3つの下位概念で構成され、「関係維持」は、対人関係を維持していくための社会的スキルの一つであると報告されている⁸⁾。本研究では、人と長く関係を維持できる能力、つまり関係維持スキルがどのような内的属性によって影響を受けているかを明らかにする。文献検討から、関係維持スキルに影響を与える個人の内的属性には、コンピテンス、自己概念、セルフ・モニタリング、自己効力感、自己受容、自己意識などが考えられる。

コンピテンスとは、他者と関わる時、自分が呈示した言動に対して他者がどのように評価するかについての認識、他者に評価されるかについての認識、またこれを遂行できるかどうかの認識のことである。コンピテンスは、社会的知識、共感、場のコントロールの3つの構成要素からなる。社会的知識は、ある社会的相互作用の状況で適切な行動を判断する能力(高木, 1996)、こういふときはこう感じるべきだと知っている能力(Coleman & Hendry, 1990)と定義している⁹⁾。共感とは、相手の感情を相手の身になって共に感じることである(澤田, 1995)¹⁰⁾。場のコントロールとは、自分の欲望を満たそうとする際に、環境から与えられるのを受け身で待つのではなく、自ら環境に働きかけようとするか否かかをさす(Coleman & Hendry, 1990)。また、Thayer, Corman, Wesman, Schmeidler, Mannucci (1995)等は、自分の環境に対して実際にコントロールしているという感覚であると定義している。つまり、社会的な知識があるということは、一般的な知識に加えて、相手についての知識をもっていることをさしている。相手に共感し、相手の身になって関わ

れば、効率的に相互作用を営むことができる。他者に対する知識があれば、相手の身になって働きかけることができ、うまく人との関係を維持できるものと考ええる。したがって、コンピテンスが高いということは、相手を判断できる知識をもち、共感でき、その時の状況にふさわしく調整して効果的に他者との関係を営む能力があると考ええる。これらのことから、個人のコンピテンスは関係維持スキルに影響を与えるものと考ええる。

自己概念(self-concept)と行動は深く関連し、自分をどのような人間と考えるかによって、個人の行動は異なってくる。自己は自分自身の思考・感情・欲求・行動の中心となるものである。菅(1984)は、ありのままの自分を無条件で愛することを「健康な自己愛」と呼び、「健康的な自己愛」の持ち主は、あるがままの自分を受け入れ、それを愛でることができるので、自分自身の欠点や限界にも臆することなく直面することができる¹¹⁾。自分を尊重できる人は、他人をも尊重でき、また、防衛的にならずあるがままの自分を受け入れられ、他人のあるがままをも受け入れることができ、他人を自己開示させることができる。その結果、他者が自分をどう見ているかが分かり、良い関係を維持できるように関わることができる¹²⁾と述べている。自尊感情(self-esteem)は、自己概念の一つのことであり、人が自分自身についてどのように感じているのか、その感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する内的側面の一つである。上田は、自己受容と他者受容は密接な関係があることを指摘し、自己を真に受け入れることができる人は他人をも受け入れることができ、健康な人間関係を結ぶことができるとしている。さらに、自己概念と同じように他者概念が重要であると述べている¹²⁾。自己の行為が他人に与えた感情や態度を読みとり、それに応じてさらに自己の行動を決定していくというフィードバックのプロセスが人間関係の形成の基盤である。他者についての概念は、自分自身のもつ心理的構造や主観・社会的偏見が反映される場合が多く他者を介して自分を知ることができる。つまり、自分をどのような人間と考えるかによって他者概念の把握が異なり、他者に映った自分と自分自身との

間にずれがないことが、効果的な関係維持につながるものと考え、これらのことから、自己概念は関係維持スキルに影響をするものと推定できる。

次に、セルフ・モニタリングとは、社会的状況を手がかりとして、自己呈示や行動表出をコントロールすることである。セルフ・モニタリング概念は自己呈示の心理的プロセスを考えるうえで重要な意味をもつ。菊池・堀毛(1994)の研究では、社会的スキルと関連があることが検証されている¹³⁾。セルフ・モニタリングが高い者ほど、自分の行動がその状況及び対人関係の中で適切なものであるかどうかに関心を持っており、自分自身の行動の社会的適切さに敏感となる。つまり、自分自身の行動を、その場に適切な行動に変容することができ、相手との関係を悪化させないで、望ましい方向にコントロールすることができる。人との関係を望ましい方向にコントロールすることで、人間関係は維持されていくものと考え、したがって、セルフモニタリングの程度は関係維持スキルに影響するものと考え。

自己効力感 (self-efficacy) について、バンデューラは、人がある行動をとるためには、その行動をとれば望ましい結果を得られるだろうという結果予期と、自分もその行動ができるという効力予期が必要だとし、高い効力予期の感情を自己効力感と呼んでいる¹⁴⁾。行動は良い結果を生むと信じて、そして、自分も行動できると信じていることが、実際に行動するためには必要である。自己効力感を持つ人は、やる気があり、高い目標に挑戦し、不安が低く、ストレスに強く、健康維持もできることが多くの研究から分かっている。たとえ、困難な作業であってもそれに取り組み、結果として成功をもたらすことも多い (Bandura, 1977, Leary & Miller, 1986)。その成功経験が、個人の自己効力感を形成し、困難にも立ち向かうことができる。自己効力感が高い人は、様々な状況の中で克服努力が大きいと考える。相手との間に問題が生じて、積極的に解決に向けて多大の努力を払おうとするであろう。このように、他者とうまく関わる人は一つの方策をもっている。良い人間関係に導き、こうやればあの人とうまくいくという対人方略を持っているものと考え、自分が人間関

係において、こうすれはうまくいこう (結果予期) と考え、そして、それができる (効力予期) ということは、見通しができることであり、この能力が高い人は関係を維持できる方略を持っているものと考え、したがって、自己効力感の関係維持スキルに影響する。

自己受容 (Self-acceptance) とは、価値判断を含めずありのままの自己を受け入れることである。看護においても、自分のありのままを受容できる者は、他者をも受けとめることができ、患者のありのままを認知し、受けとめ、他者である患者との関係維持ができるという報告がある¹⁾。ロジャース¹⁵⁾ やマスロー¹⁶⁾ は他者受容と自己認知を同義に扱っており、バーガー¹⁷⁾ の研究などでも明らかにされている。患者である他者を受容するためには、看護者自身の自己受容が重要となってくる。自己受容が高いということは、ありのままの自分を受け入れることができ、自分と意見が異なる他者をも受け入れることができる。したがって、自己受容が高いということは、人間関係における関係維持につながるものと考え、つまり、自己受容は関係維持スキルに影響することが推定できる。

自己意識において、自分の外面に対して向けられる注意を公的自己意識といい、自分の内面に対して向けられる注意を私的自己意識という。自己意識の高さが人の行動に影響を与えていることはこれまでの研究から知られており¹⁸⁾、公的自己意識の高い人は、自分自身を社会的な側面からとらえることができ、周囲の人からの評価や拒否などの反応に敏感で、人目を意識して社会的な望ましさを考慮し自分自身の行動を決定する特徴があるといわれている¹⁸⁾。また、私的自己意識の高い人は、自分の内的状態について敏感で内省的である。公的自己意識が高いということは、自分が他人にどう思われているか、自分の言動を他人がどう受け取ったか、他人からの評価を考えながら行動するということであり、人前での振る舞いを気にしやすく、対人関係では不安を生じることが多いといわれている。気持ちの安寧を求めて、常に相手が自分をどのように思っているかを考えながら、相手の期待に合わせて自分の行動をコントロール

して親密さを保とうとする。このことは、他者や場面に応じて自己の行動を使い分ける能力があることをさしている。私的自己意識が高いと、自分がどんな人間か自覚しようとし、自分を反省し、自分自身を改造する動機となり、その時の対人関係にふさわしい自己表出をすることができるために、その人との関係が維持できていくものと考えられる。

以上のことから、次のような6つの仮説を設定した。

1. 個人の内的属性であるコンピテンスは、関係維持スキルに影響する。
2. 個人の内的属性である自己概念は、関係維持スキルに影響する。
3. 個人の内的属性であるセルフモニタリングは、関係維持スキルに影響する。
4. 個人の内的属性である自己効力感は、関係維持スキルに影響する。
5. 個人の内的属性である自己受容は、関係維持スキルに影響する。
6. 個人の内的属性である自己意識は、関係維持スキルに影響する。

本研究は、これらの仮説を明らかにすることを目的とした。

用語の操作的定義

関係維持スキル：他者との関係を、親密・自己開示・深い会話・受け入れなどを積極的に押しすすめる、関わり合いを深め他者との関係を維持する能力である。

コンピテンス：常識や、他者に対する知識があり、相手の気持ちを相手の身になって感じることができ、常に他者との関係場面で最も適切にコントロールする能力である。

自己概念：自分についてのその人自身の評価であり、これが自分であると評価することである。

セルフ・モニタリング：状況や他者の行動に基づいて、自己の行動表出や自己呈示が社会的に適切か否かを観察し、自分の行動をコントロールする能力である。

自己効力感：ある結果を生み出すために必要な行動を、どの程度うまく行うことができるかという個人の確信である。

自己受容：ありのままの自己を肯定的に受け入れることである。

自己意識：自分自身に注意を向けやすい特性のことである。

社会的スキル：対人関係を円滑に運ぶことを目的として、他者との関わり合いを開始し、関係を維持し、自分自身を表現できる能力である。

研究方法

1. 調査対象：富山県、石川県内の3つの総合病院に勤務する看護師489名。
2. 調査内容：看護師の人間関係維持スキルを独立変数とし関係維持スキルに影響すると考えられる個人の内的属性であるコンピテンス、自己概念、セルフモニタリング、一般的自己効力感、自己受容、自己意識等を従属変数とし、これらの関係を調べた。人口学的背景としての性別、年齢、臨床経験年数、職位、看護教育学歴、兄弟姉妹の数、悩みをうち明けられる友人の数等についても調べ、これらの違いによる影響を調べた。
3. 測定用具：人間関係維持スキルの測定には、ブーメスターら (Buhrmester et al, 1988) の社会的スキルを基盤にして作成した和田のソーシャルスキル尺度を使用した⁸⁾。この尺度は、「関係維持」、「関係開始」、「自己主張」の3つの下位概念で構成され、関係維持の項目は9項目からなっている。評価は、「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階評価のリッカートタイプの尺度である。コンピテンスの測定には、栗本の青年のコンピテンス評価尺度を使用した¹⁹⁾。この尺度は、Adams (1983) のコンピテンスの構成要素の3つの概念をもとに、「社会的知識」8項目、「共感」12項目、「場のコントロール」10項目から構成される。評価は、「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの4段階評価である。自己概念の

測定には、ローゼンバーグ (Rosenberg, 1965)²⁰⁾ の自尊感情尺度 (Self-Esteem 尺度) を菅が日本版にした S E 尺度を使用した¹¹⁾。S E 尺度は、10項目からなるスケールであり、評定は、「全くそう思わない」から「かなりそう思う」までの4段階評定である。セルフモニタリングの測定には、Snyder のセルフモニタリング尺度²¹⁾ を、岩淵・田中・中里らが日本版にしたものを使用した²²⁾。この尺度は、「外向性」、「他者志向性」、「演技性」の3因子から構成される。評定は「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階評定である。自己効力感の測定には、坂野・東條の開発した一般性セルフ・エフィカシー尺度を使用した²³⁾。この尺度以前に開発された尺度は、特定の行動場面や臨床場面等に対しての自己効力感尺度であったが、この尺度は選択場面ばかりでなく、個人が日常生活の中で示す一般的な self-efficacy の強さを測定する尺度 (一般性 Self-Efficacy スケール) として開発された。「行動の積極性」、「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の3因子16項目からなり、各項目への回答は2件法 (はい、いいえ) である。自己受容の測定には、沢崎・佐藤の自己受容測定尺度を使用した²⁴⁾。この尺度は、「開放性」「真面目さ」「自己中心性」の3つの下位概念からなり、26項目で構成される。回答形式は2段階になっており、はじめに認知に関する質問 (はい、いいえ) があり、次ぎの段階として、それを受容しているかどうかを尋ねる形式 (①それでもかまわない。あるいは気にならない。②それではいやだ。あるいは気になる。) となっている。採点方法は最初の認知の部分の得点化せず、受容のみに関しての得点となっている。この尺度は、大学生を対象として作成されたが、項目の表現を変更することにより一般の成人を対象とすることも可能であると考えられているため、本研究では質問項目「私は学校生活を楽しんでいない。」の「学校生活」を「生活」と変更してこの自己受容尺度を用いた。自己意識の測定には、Fenigstein (1975) の尺度²⁵⁾ を、押見らによって日本版にしたものを使用した²⁶⁾。内容は、

「公的自己意識」と「私的自己意識」を測定するものであり、18項目からなり、評定法は「まったくあてはまらない」から「かなりあてはまる」までの5段階評定である。

4. 調査期間及び方法：平成13年7月10日～同年7月30日とし、20日間の留置法とした。
5. 倫理的配慮：調査対象者である看護師には、調査表とともに、研究の目的、秘密厳守の文書を添付し、個人のプライバシー確保のため無記名とし、調査の主旨に承諾できる場合には、各々が封筒に密封して返送する方法をとった。又、調査結果は、コンピューター処理し、他に散乱することのないこと、目的以外に使用しないこと等を明記した。
6. 統計処理：本研究におけるデータの平均値、分散値、標準偏差、相関係数、 α 係数等の算出にはSPSS統計ソフトを使用した。

結 果

1. 有効回答数：489名に調査を行い、回収数は439名で、有効回答数は410名であった。その内訳は表1に示した。

Table 1 Characteristics of participants n=410

Characteristics	n (%)
Gender	
Male	12 (2.9)
Female	398 (97.1)
Age	
25 or less	67 (16.3)
25 to 34	132 (32.2)
35 to 44	138 (33.7)
45 over	73 (17.8)
Experience	
3 or less	73 (17.8)
4 to 6	50 (12.2)
7 to 9	42 (10.2)
10 to 19	125 (30.5)
20 over	120 (29.3)
Position	
Manager	17 (4.2)
Head nurse	45 (10.9)
Staff	348 (84.9)
Level of Education	
Baccalaureate Nurse	4 (1.0)
Associate Nurse	28 (6.8)
Diploma Nurse	378 (92.2)
Brother and Sisters	
zero	27 (6.6)
one	133 (32.4)
two	123 (30.0)
three over	127 (31.0)
Friend	
zero	27 (6.6)
one	44 (10.7)
two to three	200 (48.8)
four to five	93 (22.7)
six over	46 (11.2)

2. 関係維持スキル, コンピテンス, 自己概念, セルフモニタリング, 自己効力感, 自己受容, 自己意識の属性別平均得点

表2には関係維持スキル, コンピテンス, 自己概念, セルフモニタリング, 自己効力感, 自己受容, 自己意識の平均得点を群別に示した。

Table 2 Comparison of the average of the maintenance intimate relationships, competence, self esteem, self monitoring, self efficacy, self acceptance, self consciousness

Characteristics	n	maintenance intimate relationships	Com	SE	SM	SE	SA	SC
Gender								
Male	12	43.58±4.16**	85.83±9.47	24.83±4.36	72.16±7.04	21.25±3.46	17.41±6.93	65.33±7.65
Female	398	49.15±6.93	88.89±8.73	24.72±3.40	72.41±8.74	22.10±3.89	17.56±6.04	65.55±8.08
Age								
25 or less	67	50.28±5.71*	88.38±6.85	24.10±3.00	75.55±7.33*	21.68±3.61	17.49±4.86	66.97±7.79
25 to 34	132	51.15±7.48***	88.71±7.95	24.47±3.76	72.95±8.56	22.04±3.92	17.96±5.25	66.25±7.40
35 to 44	138	47.37±6.34	88.26±9.05	25.05±3.25	71.85±8.86	21.89±3.81	17.59±6.51	64.79±8.67
45 over	73	46.98±6.71	90.34±10.88	25.13±3.43	69.95±8.91	22.84±4.13	16.86±7.45	64.36±8.10
Experience								
3 or less	73	50.71±6.31**	88.24±7.46	24.31±3.22	74.82±8.30**	21.60±3.63	17.84±4.61	67.38±7.20
4 to 6	50	51.80±6.36***	88.08±7.88	24.02±4.14	73.90±8.49	22.12±3.67	17.62±5.78	66.60±8.50
7 to 9	42	51.19±8.19	89.04±7.97	24.23±3.29	74.21±7.71	22.09±4.14	17.23±5.05	67.73±6.92
10 to 19	125	48.07±6.43	88.85±8.63	25.12±3.24	71.90±8.34	21.83±3.96	17.74±6.32	64.47±7.97
20 over	120	46.95±6.79	89.30±10.19	25.05±3.41	70.20±9.17	22.60±3.93	17.30±7.01	64.34±8.53
Position								
Manager	17	48.41±5.20	93.64±10.38*	26.17±2.37	71.41±10.03	23.58±3.39	14.23±6.44	65.47±6.01
Head nurse	45	50.31±7.82	94.24±9.45**	26.04±3.09*	72.44±9.03	23.04±4.51	18.15±6.34	66.28±9.04
Staff	348	48.84±6.88	87.86±8.25	24.49±3.46	72.45±8.59	21.87±3.79	17.65±5.97	65.45±8.03
Level of Education								
Baccalaureate	4	51.00±5.77	85.00±10.42	26.50±5.80	75.00±16.04	24.25±4.03	22.50±8.18	67.50±11.00
Associate Nurse	28	47.92±5.89	89.14±7.90	25.03±3.31	73.60±7.64	22.28±4.11	18.75±5.79	66.89±6.95
Diploma Nurse	378	49.04±7.01	88.81±8.81	24.69±3.41	72.29±8.68	22.03±3.84	17.42±6.08	65.42±8.12
Brother and Sisters								
zero	27	48.96±7.14	86.77±9.28	24.04±3.75	73.48±9.34	21.22±3.21	17.33±5.22	65.62±6.70
one	133	48.40±6.12	88.51±8.53	24.72±3.60	71.60±9.39	22.00±3.77	18.22±6.06	66.48±7.57
two	123	49.13±7.74	89.05±8.15	24.52±3.32	72.69±7.56	21.94±3.99	17.42±5.82	64.60±7.92
three over	127	49.47±6.89	89.29±9.43	25.07±3.26	72.74±8.84	22.47±4.01	17.06±6.45	65.46±8.89
Friend								
zero	27	42.22±4.14***	86.66±10.02	24.70±2.94*	71.29±10.81	21.44±4.38	19.70±5.26**	63.88±9.25
one	44	45.06±6.21***	84.47±8.01	22.31±4.11	68.54±8.01***	20.38±3.96	13.84±6.65***	63.81±6.54
two to three	200	49.08±7.06	88.80±9.04	24.64±3.32	71.53±8.31**	21.70±3.48	17.11±6.30	65.79±8.18
four to five	93	51.24±5.80	90.46±7.12	25.87±3.19	74.98±8.73	23.22±4.06	19.03±4.68	66.10±8.24
six over	46	51.73±6.29	90.82±8.99	25.15±2.73	75.34±7.34	23.39±3.91	18.86±5.67	65.95±7.76

onewayANOVA
Com = Competence, SE = Self-Esteem, SM = Self-Monitoring, SE = Self-Efficacy, SA = Self-Acceptance, SC = Self-Consciousness.

関係維持スキルについてみると、女性群の得点は、男性群のそれらよりも1%有意水準で高い値を示した。また、25歳未満群の値は、35～44歳群、45歳以上群等よりも高く、25～34歳群は35～44歳群、45歳以上群等よりも有意に高い値を示した。つまり、25～34歳までの若い年齢群は、35歳以上の年齢群よりも関係維持スキルの平均点が高いことを表している。さらに、経験年数別に見ると、経験3年以下群は20年以上群よりも、経験4～6年群は10～19年、20年以上の両群等よりも有意に高い平均点を示した。つまり、経験年数の少ない群の方が、経験年数の多い群よりも有意に高い関係維持スキルを示した。また、友人数の数で比較すると、友人数0群は、2～3人群、4～5人群、6人以上群等よりも有意に低い得点を示した。つまり、友人が2～3人群、4～5人群、6人以上群等友人数が多い群は、0群、1人群等よりも有意に高い平均値を示した。つまり、友人が多いほど関係維持スキルの平均値が高かった。

次に、コンピテンス得点についてみると、看護師長群、副看護師長・主任群は看護師群よりも有意に高い平均点を示した。また、友人数別にみると、2～3人群、4～5人群、6人以上群のコンピテンス得点は1人群に比べ有意に高い値を示した。

また、自己概念についてみると、副看護師長・主任群は看護師群よりも有意に高い値を示した。また、友人数の少ない1人群の得点は、2～3人群、4～5人群、6人以上群等友人数の多い群よりも有意に低い得点を示した。

次に、セルフモニタリングの得点についてみると、25歳未満の若い群は35～44歳群、45歳以上群よりも有意に高い得点を示した。また、経験年数では、実数得点からみると経験年数が短い群ほど高い得点を示し、20年以上群は、最も経験年数の短い3年以下群よりも有意に低い得点を示した。セルフモニタリングの場合も、友人数が、6人以上群、4～5人群、2～3人群等の友人の多い群は、友人の少ない群よりも有意に高い得点を示した。

さらに、自己効力感の得点についても、友人数が6人以上群、4～5人群等友人数の多い群は、

友人数の少ない群よりも有意に高い得点を示した。

一方自己受容についてみると、友人数の少ない1人群の得点は、2～3人群、4～5人群、6人以上等の複数群に比べ有意に低い得点を示した。

しかし、自己意識の得点をみると、いずれの群間で比較しても有意差はなかった。

3. 関係維持スキルと個人の内的属性との関係

1) 関係維持スキルと個人の内的属性との関係

表3には、有効回答者410名の関係維持スキルと各内的属性との関係を示した。関係維持スキルと各個人の内的属性との偏相関係数をみると、コンピテンス、自己意識との間に0.1%、セルフモニタリングとの間に5%の危険率で有意な相関がみられた。自己概念、自己効力感、自己受容との間に相関はみられなかった。また、どの内的属性が関係維持スキルに最も影響しているかをみると、コンピテンスが最も標準偏回帰係数が高く、関係維持スキルに最も影響していた。続いて自己意識、セルフモニタリングが影響していた。

Table 3 Relationships between maintenance of intimate relationship and internal attribute of the individual

Internal Attribute	n=410	
	PC	SP
Competence	0.272***	0.290***
Self Esteem	0.041	0.048
Self Monitoring	0.127*	0.124*
Self Efficacy	0.045	0.054
Self Acceptance	0.047	0.045
Self Consciousness	0.217***	0.213***

PC shows partial correlation coefficient and
SP shows standard partial regression coefficient.

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

2) 内的属性別にみた関係維持スキルとの関係

表4には、関係維持スキルと内的属性との関係を示した。

(1) 関係維持スキルとコンピテンスとの関係

関係維持スキルとコンピテンスの関係についてみると、女性群において0.1%の危険率で有意な相関を示した。しかし、男性群では相関はみられなかった。年齢別では25～34歳群、35～44歳群、45歳以上の群において、それぞ

Table 4 Relationships between nurses' maintenance of intimate relationships and internal attribute

n=410

Characteristics	n	Internal Attribute					
		Com	SE	SM	SE	SA	SC
Gender							
Male	12	0.604	-0.541	-0.653	0.613	-0.273	0.017
Femal	398	0.274 ***	0.054	0.142 **	0.029	0.051	0.223 ***
Age							
25 or less	67	0.161	0.145	0.048	0.070	0.035	0.206
25 to 34	132	0.279 **	0.063	0.062	0.110	-0.024	0.137
35 to 44	138	0.262 **	0.086	0.165	0.088	0.061	0.262 **
45 over	73	0.385 **	-0.023	-0.046	0.210	-0.075	0.227
Experience							
3 or less	73	0.232	0.115	-0.048	0.031	0.029	0.230
4 to 6	50	0.051	-0.087	0.305 *	0.407 **	-0.049	-0.079
7 to 9	42	0.316	-0.021	-0.072	0.215	-0.188	0.182
10 to 19	125	0.255 **	0.107	0.074	0.050	0.185 *	0.245 **
20 over	120	0.391 ***	0.049	0.080	-0.017	-0.067	0.259 **
Position							
Manager	17	0.279	0.019	0.089	0.142	0.069	0.332
Head nurse	45	0.406 **	0.125	-0.192	0.090	-0.171	0.379 *
Staff	348	0.254 ***	0.041	0.160 **	0.030	0.053	0.180 **
Level of Education							
Baccalaureate Nurse	4	—	—	—	—	—	—
Associate Nurse	28	-0.124	0.053	0.330	0.078	-0.098	0.465 *
Diploma Nurse	378	0.275 ***	0.045	0.124 *	0.049	0.040	0.217 ***
Brother and Sisters							
zero	27	0.306	0.132	0.312	-0.249	0.206	0.353
one	133	0.133	0.003	0.195 *	0.010	0.125	0.210 *
two	123	0.425 ***	0.101	0.132	0.103	-0.116	0.135
three over	127	0.284 **	-0.021	0.048	0.049	0.110	0.317 ***
Friend							
zero	27	0.519 *	0.237	0.129	-0.228	-0.189	-0.113
one	44	0.317 *	0.056	0.263	-0.151	0.089	-0.055
two to three	200	0.290 ***	-0.009	0.091	0.067	0.086	0.201 **
four to five	93	0.137	-0.066	0.036	0.253 *	0.015	0.345 **
six over	46	0.235	0.031	0.110	-0.055	0.060	0.450 **

Com = Competence, SE = Self-Esteem, SM = Self-Monitoring, SE = Self-Efficacy, SA = Self-Acceptance, SC = Self-Consciousness. * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

れ1%の危険率で有意な相関がみられた。経験年数別では、10～19年群に1%、20年以上の群に0.1%の危険率で有意な相関がみられた。職階別では、副看護師長・主任群で1%、看護師群で0.1%の危険率で有意な相関がみられた。学歴別では、専修学校卒業群でのみ0.1%の危険率で有意な相関がみられた。兄弟姉妹数では、2人群に0.1%、3人以上群に1%の危険率で有意な相関がみられた。友人数では、全くいないと答えた群と1人と答えた群に5

%, 2～3人と答えた群に0.1%の危険率で有意な相関がみられた。

(2) 関係維持スキルと自己概念との関係

関係維持スキルと自己概念の関係では、性別、年齢、経験年数、職位、学歴、兄弟姉妹数、友人数別にこれらの関係をみたが、いずれの群においても有意な相関はなかった。

(3) 関係維持スキルとセルフモニタリングとの関係

関係維持スキルとセルフモニタリングとの

関係では、女性群において1%の危険率で有意な相関を示した。年齢別では、相関は示さなかった。経験年数別では、4～6年群のみに5%の危険率で有意な相関がみられた。職階別では、看護師群に1%の危険率で有意な相関がみられたが、看護師長群、副看護師長・主任群では相関はなかった。学歴別では、専修学校卒業群に5%の危険率で有意な相関がみられた。兄弟姉妹数では、1人の群に5%の危険率で有意な相関がみられた。友人数の違いでは、いずれの群においても相関はみられなかった。

(4) 関係維持スキルと自己効力感との関係

関係維持スキルと自己効力感の関係では、性別、年齢、職位、学歴、兄弟姉妹数別にこれらの関係をみたが、いずれの群においても有意な相関はなかったが、経験年数の4～6年群に1%、友人数の4～5人群に5%の危険率で有意な相関がみられた。

(5) 関係維持スキルと自己受容との関係

関係維持スキルと自己受容との関係では、性別、年齢、職位、学歴、兄弟姉妹数、友人数等のいずれの群においても有意な相関はなかった。しかし、経験年数の10～19年群において5%の危険率で有意な相関がみられた。

(6) 関係維持スキルと自己意識との関係

関係維持スキルと自己意識との関係では、女性群において0.1%の危険率で有意な相関を示した。男性群では相関はみられなかった。年齢別では35～44歳群においてのみ1%水準で有意な相関がみられた。経験年数が10～19年群、20年以上の長い経験群において1%の危険率で有意な相関がみられた。職階別では、副看護師長・主任群に5%、看護師群に1%の危険率で有意な相関がみられた。学歴別では、短大卒業群に5%、専修学校卒業群に0.1%の危険率で有意な相関がみられた。兄弟姉妹数では、1人群に5%、3人以上群に0.1%の危険率で有意な相関がみられた。友人数では、2～3人群、4～5人群、6人以上の複数の友人数群においてそれぞれ1%の危険率で有意な相関がみられた。

3) 本研究の対象に使用した尺度の信頼性

表5には本研究で使用した測定用具とその信頼係数を示した。本研究における対象に使用した場合の各尺度の信頼性係数 α を示した。関係維持スキルは0.846、コンピテンスは0.843、自己概念は0.847、セルフモニタリングは0.844、自己効力感0.844、自己受容は0.855、自己意識は0.852であった。

Table5 Reliability in the seven measurement scale

Measurement Scale	Cronbach α
Social Skill Scale	0.846
Competence Scale	0.843
Self-Esteem Scale	0.849
Self-Monitoring Scale	0.844
General Self-Efficacy Scale	0.844
Self-Acceptance Scale	0.855
Self-Consciousness Scale	0.852

考 察

1. 人口学的背景からみた関係維持スキル、コンピテンス、自己概念、セルフモニタリング、自己効力感、自己受容、自己意識等の平均値の比較
関係維持スキルにおいて、男性に比較して女性の平均得点が高く有意差がみられた。M.アーガイルは、男性に比べて女性は友人や親族に対して親密な愛着を維持し、男性は仕事の同僚に対して愛着を持っていると述べ、特徴として、男性は友人に対してあまり自己開示せず、親密な愛着を抱かない。愛着は集団に向けられ、彼らは親密な会話ではなく、共有的な活動に時間を費やすと述べている²⁷⁾。男性と女性が人間関係に求める内容が異なることを考えると、女性の場合、秘密を打ち明けたり、精神的支えとしての相手を望み、同じ感情を共有して関係を維持しようとする傾向があるために、関係維持スキルが高く出たものと考えられる。菊池らの研究でも、女性の社会的スキルが高いことが証明されている¹³⁾。年齢別では、25歳～34歳群が年長群に比べ高く有意差がみられた。この年代は、発達段階から考えると、仲間関係を形成していく時期であり、親から独立し、仲間関係への依存が増大する時期である。斎藤²⁸⁾によると、この年代は、社会での適応や他者とうまくやって

いくことを学ぶ時期であるとの報告もあるように、積極的に関係維持を持とうとする姿勢が有意に高い値になったものと考え。また、若い群は、仲間集団に帰属していたいと傾向があり²⁹⁾、人との調和をとって対応しないと関係が維持できないという学びが、この結果にむすびついたものと考え。南ら(1980)³⁰⁾の日本社会の構造と人間関係の検討では、日本人の人間関係の基底には自我の「不安定」「不確実」「弱さ」があり、この年代では、自我を確立しようとして、不安定や弱さをより強く感じ、集団内での人間関係維持の強化を図ろうとする傾向があり、個人が集団の中で安住することで、不安定感などを解消しようとしていると述べている。この結果は、南らの結果を支持している。経験年数別では、4～6年群が最も平均得点が高く10年以上群に比べて有意に高かった。臨床経験が4～6年になると、仕事に慣れ臨床での看護能力も安定してきており、仕事の楽しさを感じる余裕がでてくる時期である。10年以上群と異なり、役職などの責任を課せられることもない。仕事に対しての興味や関心が高く、自分自身を向上させたいとの積極的な姿勢がみられる時期でもある。人はより高い報酬や仕事への達成感を通じて自己実現を求め、今より高い地位への要求がおこり、そのためには、上位者からの承認や認知を受ける必要がある³¹⁾。経験4～6年の看護師は、上位者にどのように自分が映るか気になり、先輩の期待に応えようと相手の反応と自分の行動に気を遣いながら関係を維持していく傾向があるものと考え。友人数が6人以上群は、友人数が少ない群に比較して関係維持スキルの得点が有意に高かった。社会的スキルと友人数との関係については、菊池らの研究でも明らかにされ、社会的スキルの高い人は低い人に比べて、友人数が多いことを報告している¹³⁾。他者と意見を交換したり体験や経験を共有することは、相手との共通の認識や、他者への共感や関心を喚起するといわれている²⁷⁾。和田の関係維持スキルでは、共感や関心が関係維持をしていくうえでの求められる要素として内包されており、行動に影響すると述べられている²⁷⁾。友人数が多いと、他者への共感や関心が高まり、相手を知るための情報を入手しやすくな

り、それぞれの人間にどのように対応して関係を維持すればよいかの判断ができるようになるために、友人数が多いと関係維持スキルが養われることからくるものと考え。

次に、コンピテンスについてみると、職位が副看護師長・主任群のコンピテンスは看護師群のそれらに比較して高い有意差を示した。副看護師長・主任は管理職ではないが、中堅看護師としての役割を担っている。斎藤は、中堅看護師が役割遂行に期待される自己意識が高いことを報告しており³²⁾、周囲の期待から、他者との関係場面で最も適切に自分をコントロールすることが出来るものと考え。上司や後輩に対して、どのような自己の呈示がどう評価されるかを認識でき、効果的に相手との相互関係を促進させるよう行動をとろうとするために、コンピテンスの高さに結びついたものと考え。友人数の違いより比較すると、友人数の少ない群に比べ6人以上の友人を持っている群は、有意に高いコンピテンスを示した。このことは、友人関係によってもたらされるものが多いことを表し、帰属感や確かな同盟感、そして意見や信条、感情的な反応を生み出す原点になっているといわれ³²⁾、さらに、どのように反応すれば適切かを学ぶ機会となり、自分自身の態度や信条を意識的にも無意識的にも修正することができるようになるといわれている³²⁾。また、他者と比較することで自分を評価することも出来る。コンピテンスの構成要素とされる社会的知識、共感、場のコントロールは友人関係によって学習されることが多く、したがって友人数が多い者ほどコンピテンスが高いと考えられる。

さらに自己概念についてみると、職位が副看護師長・主任群のそれらは看護師群に比較して高い有意な得点がみられた。遠藤・井上ら(1998)は、人は一般的にある課題に対して期待を持っていて、それぞれの期待の程度に応じてフィードバックを求めたり、評価を行ったりすると述べている³³⁾。副婦長・主任は、自らの責任と役割に対する周囲の期待に添ったフィードバックを求めており、周囲の自分に対する評価の程度を察知している。自尊感情は自己概念の一つとされ、自分自身についてどのように感じているか、その感じ方のことで

ある。副婦長や主任は、スタッフとしての役割だけでなく、リーダーシップや管理者の補佐的役割を課せられる立場に立たされている自分を感じることができるようになるために、看護師等よりもいろいろな立場からの自分を感じることができるために自己概念得点が高く出たものとする。

友人数が、1人群の自己概念は、2～3人群、4人～5人群、6人以上群等のそれらよりも有意に低くでた。自己概念の高い人は、他者との関係において必要以上に防衛的ではなく、自分を尊重するのと同様に相手のことも尊重でき、他者を自己開示させることが出来る、他者から自分がどう見られているかが分かり良い関係を維持できるように関わる事が出来る¹¹⁾。その結果、よい関係の維持は、自分への良い評価へとつながり、至っては達成感を得ることが出来るものとする。

次にセルフモニタリングについてみると、25歳未満群のセルフモニタリングの得点は、35歳以上の2群の得点と比較すると高い有意差を認めた。この年代は、自我同一性が確立するときであり、自分自身を社会の中で位置づけて考えられる時期である²⁹⁾。マズローは、この年代の特徴として、自己実現をあげ、現実についての有効な知覚、自己の内外にある問題への熱中、社会的関心や対人関係、他者や自分自身についての受容などをあげている³⁴⁾。また、経験年数においても、3年以下群の得点は20年以上群のそれらと比較して高い有意差がみられ、若く臨床能力も未熟な看護師は、自己実現に向けて、自己に対する観察や、ある状況で適切な行動をとることに関心が高く、自己の感情をコントロールしようとする傾向が高いことが推定できる³⁴⁾。自己に対する観察が出来るということは、他者の反応に敏感であるということであり、先輩の反応や様々な状況に対して、いつもその場に適切な行動をとろうとする気配りができるようになり、それがセルフモニタリング行動の得点を高めたものとする。また、友人数が6人以上群に有意な高いモニタリング得点がみられた。その人のセルフモニタリングの高さに応じて対人関係パターンが異なるといわれ、セルフモニタリングの低い人の、友人関係は感情的な結びつきに基づいていて、自分の最も好ましい人と時間を過

ごしたいと考え、一方、高い人は活動の共有という観点で友人関係を捉えられている^{18) 35)}。したがって、25歳以下群で経験3年以下の若い群は、自己の拡大を望み、自己実現を達成しようとして、同僚との交流の中で観察する目が養われ、その結果、セルフモニタリングの得点の高さにつながったものとする。

また、自己効力感についてみると、友人数が、4～5人群や6人以上群で高い有意な自己効力感の平均得点がみられた。自己効力感が高いということは、良い結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく出来るかという確信が高いことであり、友人数が多い人ほど、どのようにすれば相手とうまくいくか、関係を維持できるかの学びができていたために、関係維持のための方略を考えることができるようになり、自己効力感が高くでたものとする。

さらに、自己受容についてみると、友人が0群の自己受容の平均点は、その他の群と比較して有意に高かった。友人数が0群は1人群よりも高かったが、1人群の得点は、2人以上の全部のそれらよりも有意に低かった。自己受容は、ありのままの自己を受け入れているか否かを問題としており、いくつもの自己の具体的側面について問われる概念であるとされている³⁶⁾。友人の定義も様々であり、自己受容との関連を説明することは難しい。しかし、人は、他者から自分がどのような人間であるか指摘されて、自分を受け入れることができいくので、友人が少ないと人との関係で気づかされることがなく、自分の嫌な部分を受け入れることができないために自己受容度が低くでたものとする。

2. 関係維持スキルと個人の内的属性との関係

関係維持スキルと各内的属性との関係をみると、コンピテンス、自己意識、セルフモニタリングとの間に有意な相関がみられた。標準偏回帰係数でみると、関係維持スキルに影響しているのは「コンピテンス」が最も強く、次に「自己意識」「セルフモニタリング」の順であった。コンピテンスが社会的スキルと非常に深い関連があることは先行研究で明らかにされており、コンピテンスは社会的スキルの認知能力ととらえられている³⁷⁾。コ

コンピテンスの高い人は、他者との相互作用を効率的に形成していく能力が高いということであり、状況を適切に判断でき、他者についての知識もあり、相手の身になって共に感じることができ、望ましい方向へと自分の行動をコントロールできるので、関係維持スキルとコンピテンスの高い相関になったものと考え。また、セルフモニタリングが高い者ほど、自分の行動がその状況や対人関係の中で適切であるか否かに常に関心を持っており、望ましい関係に導くよう行動を調節するために、関係維持スキルとセルフモニタリングとの相関につながったものと考え。菊池・堀毛の研究でも同様の結果が報告されている¹³⁾。自己意識については、公的自己意識が高いと他人の評価を気にし、社会的な望ましさを考慮して自分の行動を決める傾向があり、私的自己意識が高ければ、内省し対人関係を維持できるように自己表出のしかたをコントロールしていくことができるために、自己意識と関係維持スキルとの相関につながったものと考え。

関係維持スキルとコンピテンスとの関連についてみると、女性群において有意な相関が見られた。本研究での男性数は12名の少数であったため確認はできないが、Sherrod (1989)²⁷⁾によると、「典型的な男性は活動のパートナー、興味関心を共有する者を求めるのに対し、典型的な女性は親密な腹心の友、同じ感情を有する友を求める」という。「女性の方が他者に対する興味・関心の度合いが強く、他者に対する知識も豊富である。また、感情的な同調も強く、他者に対する知識があれば、相手の身になって働きかけることができ相手にあわせて自分の行動をコントロールできる。」と述べている。つまり、Bellの定義にもあるように「コンピテンスは自尊心、助け合い、仲間に対する満足度や仲間付き合いの困難さ、恥ずかしさ」等に対して効果的に変化させる能力と考えると、女性は情緒的なつながりの中で、相手との関係を効果的に変化させることができるために、関係維持スキルとの相関につながったものと考え。

これらの関係を、年齢別でみると、25～34歳群、35～44歳群、45歳以上群等に、有意な相関がみられた。この年代は、経験が豊富で感情的にも安定

しており、他者をよく観察し理解しようと努め、相手の気持ちに合わせて自己をコントロールできるので、他者との相互作用を効率的に形成していく能力が高い。つまり、コンピテンスが高く、関係維持スキルとの相関に結びついたものと考え。経験年数が10～19年、20年以上群に有意な相関がみられたのは経験年数が高いほど、看護能力は熟練していき、安心感があり、人間的にも成熟してくる。社会的な知識が豊かとなり、様々な状況や場面、患者にも対応できるような能力も出てくる。つまり、コンピテンスが発達してくるために、自分を取り巻いている環境（人）との相互作用を効果的にすすめることができるようになり、関係維持スキルとの相関につながったものと考え。職位別でこの関係をみると、副看護師長・主任群、看護師群に有意な相関がみられた。副看護師長や主任は、管理職ではないが、看護スタッフと婦長との間で最も調整的な役割が求められ、自らの地位にあうような態度と行動が期待される。梶田によると³⁸⁾、「人が社会的存在であるからにはその社会の役割体系の中で、自らの役割にあうような態度と行動を期待されている。」と述べており、副看護師長や主任群が自らも期待される役割を意識し、様々な要望にどのように振る舞うべきであるかという行動に近づけようとする。つまり、周囲との相互作用を効果的にすすめる能力であるコンピテンスが働く。このことが関係維持スキルとの相関に結びついたものと考え。看護師群は、患者のそばに最も長くあり、様々な人間と接している。また、上司や他の医療スタッフとの関係も直接的であり、チーム間の安定のために、また、看護ケアを効果的に実施するために、環境と相互作用をする能力が高められる。このことが、関係維持スキルとの相関につながったものと考え。専修学校卒業群では、体験や経験をとおしての学習や、理論よりも実践から学ぶことが多いように考えられる。相手と関わる時、まず話をし、近づこうとする姿勢があり、自分から関係を始め、受容された場合には関係を維持していかなければならないと行動をする。つまり、状況に効果的にかわる能力が培われることから、関係維持スキルとの相関につながったものと考え。しかし、

他の学歴群の人数は圧倒的に少なく、さらなる検討が必要である。兄弟姉妹数が多い者ほど、社会的スキルの獲得ができているとの報告¹³⁾もあり、本研究の結果では、2人群と3人以上群にコンピテンスと関係維持スキルとの間に有意な相関がみられたのは、兄弟げんか等を通して社会性を獲得し、幼い頃より良好な関係を維持するにはどうすれば良いかの学習が出来てくるため、関係維持スキルとの相関につながったものと考え。友人数については、N.アイゼンバーグが「友人仲間が社会化の一つの条件である」と述べ、友人数が向社会的行動に影響を与えることを報告している³⁾。和田の研究⁸⁾によると、友人数はソーシャルスキルと関係があり、友人数の平均が8～10人と報告されているが、今回の結果では、2～3人群において有意な相関がみられた。「親しい友人の数」であったので、悩みをうち明けられる親しい友人数が2～3人いれば、友人との関係を大切にしようとして、相手と深く関わりを維持し、自分より相手にあわせ自分の行動をコントロールしていくために高い相関となったものと考え。

次に、関係維持スキルとセルフモニタリングとの関係についてみると、女性群において有意な相関が見られた。女性は男性に比較すると相手の感情を読みとることが容易であり、それは、男女の脳の違いからもきているとの報告³⁹⁾もあり、女性の方が相手の感情を判断して、しかもきめ細かく情緒的に心を配ることができるといわれている。相手の感情を読みとることができれば、自分自身の行動が、相手にとって望ましいものであるか否かの判断ができ修正が可能である。したがって、関係維持スキルとの相関につながったものと考え。年齢別にこれらの関係をみたが、相関はなかった。経験年数の4～6年未満群に有意な相関がみられた。臨床経験が4～6年未満は、仕事にも慣れ安定した力量が発揮でき、仕事自体にも楽しさを感じられる余裕もでてくる時期である。特別な役職や責任感を課せられることもないので、興味関心の幅は広がり、社交性も高まり、様々な人といろいろな状況で適切な行動をとることができるようになる。また、他者が示す手がかりにも敏感で、上司や同僚、後輩に対しても良い関係を維持

しようと行動を変容させることができるので、関係維持スキルとの相関になったものかもしれない。これらの関係を職位別でみると、看護師群において有意な相関があった。看護師群は役職が無く、管理上の責任感を課せられることはないが、患者に対しては最も身近な存在で、看護ケアを効果的に実施することが要求される。そのため、人間関係を良好なものに維持していきたいとの意識が働き、他者（患者）を喜ばせたり、良い関係に持っていこうと努力をして自分を観察したり、相手にあわせて自分の行動を調整していくこと等が関係維持スキルとの相関になったものと考えられる。

また、セルフモニタリングと関係維持スキルの関係を学歴別でみると、専修学校卒業群に有意な相関がみられた。専修学校卒業群は、自分がどのように振る舞えばいいかを知る手がかりとして、理論からではなく、状況や他者の行動を注意深く観察し、それに応じて自分の行動を修正して振る舞うために、関係維持スキルとの相関になったものと考え。さらに、兄弟姉妹数が1人群において有意な相関がみられた。兄弟姉妹が1人では、相手と効果的な相互作用をするために、相手をよくモニタリングし、その関係を維持しようとする。兄弟との関係で培われたモニタリングの能力や行動の仕方は、発達課題を達成しながら変化し、大人の関係の中で、適切な行動をとることが出来るようにコントロールされるため、関係維持スキルにむすびついたものと考え。

次に、関係維持スキルと自己効力感との関係をみると、経験年数4～6年群においてのみ有意な相関がみられた。セルフモニタリングで推定したように4～6年群は、仕事に慣れ安定した力量が発揮できる時期である。自信もあり、こうすればうまくいくだろうとある程度の見通しができる、つまり、こうすればうまくいくという対人方略を学習してきているものと考えられ、そのことが関係維持スキルとの相関にむすびついたものと考え。

さらに、関係維持スキルと自己受容との関係をみると、経験年数10～19年群のみに有意な相関がみられた。10～19年は臨床経験が豊富で、精神的にも安定しており、人間的には成熟している。自

己をありのままに受け入れることができなくても、自己を良く知っている。他人と自分を区別し、相手を認めることができるので、他者と意見が異なる場合でも他者の考えを受け入れ、関係維持を継続させるための方略を使うことができるために、関係維持スキルとの相関につながったものと考えられる。

また、関係維持スキルと自己意識との関係をみると、女性群において有意な相関が見られた。女性とは人との良い関係を望む傾向が強く、自分が他人にどう思われているか気にしやすい。そのため自分への注意は人当たりの良い状態、よく見せたいと関わり合うために関係維持スキルとの相関につながったものと考えられる。年齢が35～44歳群に有意な相関がみられた。この年代は、人間的な関わりや体験を通して成熟してくるために、人との関係ではどのように関わるか、関係を良くしようとする方向に働く。私的自己意識よりも、自分の振る舞いなど他者から観察される側面つまり公的自己に対する注意が高くなるため、関係維持との相関につながったものと考えられる。経験年数が10～19年、20年以上群は、看護能力的にはベテランといわれる群であり、若者よりも穏和であるという周囲の期待もあり、自分も円熟した安定した人間であるとの行動をとる。相手の期待にあわせて自分をコントロールして親密さを保とうとする。つまり自分の行動を使い分ける能力が高いと考える。このことが、関係維持スキルとの相関につながったものと考えられる。職階別では、副看護師長・主任群、看護師群に有意な相関が示された。副看護師長や主任は、看護能力や管理面での能力が要求され、良い評価を得ようとして良く見せようと行動する。一般の看護師群は、様々な人を対象に良い人間関係を形成しなければならないために自分を良く見せたい、人に良い印象を与えようとする行動にでるので、これらの2群において、関係維持スキルとの相関につながったと考える。学歴別では、専修学校や短大の卒業群は、学歴を意識し、どのようにみられているかの不安が強いのではないかと考える。よく見られたい、低くみられたくないという意識から公的自己に注意し、望ましい関係を維持しようとするので、関係維持スキルと

の相関につながったものと考えられる。兄弟姉妹数が1人においては、相手との関係のバランスを保つように自分自身の行動を決定し、兄弟姉妹数が3人以上になると、兄弟との日常生活の中から、相手や場面に応じて自分の行動を使い分ける能力を獲得していく。このことが、関係維持スキルとの相関につながったものと考えられる。友人数が2～3人、4～5人、6人以上の各群において有意な相関がみられた。自分が他人にどう思われているか、自分の発言を他人がどう受け取ったか、他の人からの評価や拒否などに対して敏感で、人目を気にして社会的な望ましきで自分自身の行動を決定する傾向があり、友人数が複数になると、自己意識も高くなり、友人との関係も良好に保とうとする姿勢が生まれ、このことが関係維持スキルとの相関につながっているのかもしれない。

結 論

看護職者の410名に関係維持スキル、個人の内的属性であるコンピテンス、自己概念、セルフモニタリング、自己効力感、自己受容、自己意識などを調査し、関係維持スキルと内的属性との関係について調べた結果、次のことが明らかになった。

1. 個人の内的属性であるコンピテンスは、関係維持スキルに影響する。 2. 個人の内的属性であるセルフモニタリングは、関係維持スキルに影響する。 3. 個人の内的属性である自己意識は、関係維持スキルに影響する。 4. 関係維持スキルに最も影響するのはコンピテンスであり、ついで自己意識、セルフモニタリングが影響する。以上のことから、仮説1, 3, 6は肯定され、仮説2, 4, 5は否定された。

本研究における限界

本調査は、3つの施設で実施したものであり、看護職場の他集団においても、このような傾向の結果が見られるものかを追跡してみる必要がある。

研究成果の活用

社会的スキルとの関連性を検討することは、看護職者の内的属性の影響を調べ、望ましい対人関係を維持するための内的属性の働きかけ方を検討する上で役立つものと考えられる。また、関連性が認め

られた内的属性については、看護基礎教育の過程でどのように育むかの方略を検討するうえでの基礎的なデータとして活用できるものと考え。

謝 辞

本研究の調査を実施するにあたり、調査にご協力をいただきました市立砺波総合病院の石崎志津子看護部長、国立山中病院の坂東芳子看護部長、国立療養所富山病院の岩崎春美総婦長、ならびに各セクションの婦長をはじめ看護師スタッフの皆様方に厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) Hildegard E. Peplau, (稲田八重子・小林富美恵他訳) : 人間関係の看護論. 医学書院, 東京, 2000.
- 2) 菊池章夫 : 思いやりの心理. 現代のエスプリ, 至文堂, 1991.
- 3) H. アイゼンバーグ・P. マッセン, (菊池・二宮訳) : 思いやり行動の発達心理. 金子書房, 東京, 1996.
- 4) 菊池章夫 : 思いやりを科学する. 川島書店, 東京, 1995.
- 5) 菊池章夫 : また 思いやりを科学する. 川島書店, 東京, 1998.
- 6) マーク.H. デヴィス, (菊池章夫訳) : 共感の心理学. 川島書店, 東京, 1999.
- 7) 千葉京子, 相川充 : 看護における社会的スキル尺度の構成. 看護研究 33(2) : 53-62, 2000.
- 8) 和田実 : 対人的有能性に関する研究. 実験社会心理学研究31(9) : 49-59, 1991.
- 9) 高木次郎 : 日本人の対人コンピテンス. 対人関係の心理学, 福村出版, 1996.
- 10) 澤田瑞也 : 共感的コミュニケーションの発達. 1996.
- 11) 菅佐和子 : S E (Self-Esteem) について. 看護研究 17(2) : 1984
- 12) 上田吉一 : 精神的に健康な人間. 川島書店, 東京, 1993.
- 13) 菊池章夫, 堀毛一也 : 社会的スキルの心理学. 川島書店, 東京, 1994
- 14) 江本リナ : バンデューラの自己効力理論. 月刊ナーシング 19(3) : 1997.
- 15) C. R. ロジャース, (伊藤博編訳) : パーソナリティ理論. 岩崎学術出版, 1967.
- 16) A. H. マスロー (上田芳一訳) : 完全な人間. 誠信書房, 東京, 1964.
- 17) Berger. E. M : The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. The Journal Of Abnormal and psychology, 1952.
- 18) 村井健祐, 土屋明夫, 田之内厚三 : 社会的アプローチ. 北樹出版, 東京, 2000.
- 19) 栗本かおり : 青年のコンピテンス評価尺度の作成. 関西学院大学大学院社会学部紀要第78号 : 145-153, 1997.
- 20) Rosenberg M : Society and the adolescent self-image. Princeton Univ, Press, 1965.
- 21) Snyder M : The Self-monitoring of expressive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 1974.
- 22) 岩淵千秋, 田中国夫, 中里浩明 : セルフモニタリング尺度に関する研究. 心理学研究 53, 1982.
- 23) 坂野雄二, 東條光彦 : 一般性セルフエフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究 12(1) : 73-82, 1986.
- 24) 沢崎達夫, 佐藤純子 : 大学生の自己受容測定尺度作成の試み. 日本教育心理学会第26回総会発表論文集 : 366-367, 1984.
- 25) Fenigstein A, Scheier M F & Buss A H : Private and public Self-consciousness. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 1975.
- 26) 丹野義彦, 坂本真士 : じぶんの心からよむ臨床心理学入門. 東京大学出版会, 55-57, 2001.
- 27) M. アーガイル & M. ヘンダーソン, (吉森護訳) : 人間関係のルールとスキル. 北大路書房, 京都市, 1993.
- 28) 斎藤誠一 : 人間関係の発達心理学 4. 培風館, 東京, 1999.
- 29) 関口一 : 人間関係の発達心理学 5. 培風館,

- 東京, 1999.
- 30) 南博: 日本の社会構造と人間関係. 講談社, 1980.
- 31) 狩野素朗: 対人行動と集団. ナカニシヤ出版, 京都市, 1995.
- 32) S.ダック, (仁平義明訳): フレンズ, スキル社会の人間関係学. 福村出版, 東京, 1996.
- 33) 遠藤達雄, 井上祥治, 蘭千尋: セルフエスティームの心理学. ナカニシヤ出版, 京都, 1998.
- 34) 斉藤誠一: 人間関係の発達心理学 4. 培風館, 東京, 1999.
- 35) 大淵憲一, 堀毛一也: パーソナリティと対人行動. 誠信書房, 東京, 1996.
- 36) 沢崎達夫: 自己受容に関する研究(3). カウンセリング研究 Vol28, 1995.
- 37) 相川充・津村俊充: 社会的スキルと対人関係. 誠信書房, 12-21, 東京, 1998.
- 38) 梶田叡一: 自己意識の心理学. 東京大学出版会, 東京, 1998.
- 39) 蓮見将敏, 小山望: 人間関係の心理学. 福村出版, 東京, 1999.

Relationships between nurses' maintenance of intimate relationships in interpersonal relationships and their internal attributions

Chikako HAYASHI¹⁾, Keiko YOKODA²⁾, Shizuko TAKAMA²⁾

1) School of Nursing, National Toyama Hospital

2) School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University

Abstract

The purpose of this study was to examine relationships among maintenance of intimate relationship of sub-concepts of social skill scale and their competence, self esteem, self monitoring, generally self efficacy, self acceptance and self consciousness. The instruments used were Intimate Relationships scale of sub-concept of social skill scale by Wada, competence scale by Kurimoto, Self-Esteem scale of Japanese Version by Suga, Self Monitoring Scale by Iwabuchi et al, Generality Self Efficacy scale by Sakamoto et al, Self Acceptance Scale by Sawazaki et al, and Self Consciousness Scale by Omi. The scores of competence and self consciousness showed partial correlation coefficient with significant level of 0.1% to those of maintenance of intimate relationship. The scores of self monitoring showed partial correlation coefficient with significant level of 5% to those of maintenance of intimate relationship. The scores of competence showed standard partial regression coefficient with significantly higher to those of maintenance of intimate relationship.

Key words

Relation maintenance skill, Competence, Self monitoring, Self consciousness
Self efficacy